

(様式1)

令和7年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	(1) 一般目標 一人一人に応じた健康な生活を目指し、自己教育力を養い、進んで社会参加できる児童生徒を育成する。 (2) 具体目標 ア自己の病気を理解し、病気に向き合い、安全で健康な生活を営む児童生徒を育成する。(校訓「健康」から) イ夢や志の実現のため、主体的・対話的に学習に取り組む児童生徒を育成する。(校訓「自主」から) ウ望ましい集団や豊かな体験を通して社会性と豊かな心を育む児童生徒を育成する。(校訓「協同」から) エ社会的自立を目指し、障害による困難を改善・克服し、積極的に社会参加しようとする児童生徒を育成する。(校訓「自主」「協同」から)
------------	--

学校整理番号	特8
学校名	青森県立青森若葉養護学校
対象障害種別	視覚・聴覚・知的・肢体 <u>病弱</u>

(2) 現状と課題	・在籍する児童生徒が30名弱であることに加え、児童生徒の登校が安定しないことにより、児童生徒同士の「対話的な学び」を成立させづらい状態にある。そのため、学校運営協議会で話題に取り上げながら、地域資源(学生団体、町内会)を活用した授業づくりに取り組んでいる。 ・精神疾患の児童生徒が約半数を占めていることから、令和3年度よりCo-MaMeを活用した実態把握を行い、医療機関並びに保護者と共通の尺度で児童生徒の実態把握に努めている。また、小児慢性疾患の児童生徒については、客観的指標として別途諸検査を実施し、根拠のある指導を行っている。 ・これまで同様、定期的(年3回)に医療機関との情報交換をする「支援連携会議」を開催し、医学的見地からの助言を得ながら児童生徒の指導にあたっている。 ・転入生の多くが前籍校において不登校の経験があり、本校に転校後も登校が安定しない生徒が複数在籍する。これまで以上に病状や障がい特性に応じた指導をするため、校内規定に基づきICT機器を活用したオンラインによる遠隔授業を行っている。 ・医療的ケア対象児への対応として、校内医療的ケア安全委員会の定期的開催をするとともに、指導医並びに青森県小児在宅支援センターの助言を得ながら、校内体制の整備に努めている。併せて、医療的ケア児童生徒在籍の有無にかかわらず認定教職員を拡充するため研修受講を奨励している。
-----------	---

自己評価実施日	令和7年12月19日(金)
学校関係者評価実施日	令和8年2月9日(月) ※書面による開催

(3) 重点目標	1 児童生徒一人一人の障がい特性と指導課題を踏まえた指導
	2 豊かな心を育てる教育の展開
	3 キャリア教育の推進
	4 保護者との信頼関係の構築
	5 教職員が力を発揮できる環境の構築と研修の充実
	6 病弱特別支援教育のネットワーク体制の充実

(4) 結果の公表	令和8年2月13日(金)第2回参観日全体会において、保護者に説明した。 また、全体会欠席の保護者に対しては、説明資料を配付した。 さらに、学校webページ上に結果を掲載する。
-----------	---

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成	
学識経験者(大学教授)	1名
医療関係者(小児科医師)	1名
民間企業関係者(会社社長他)	2名
地域住民(町会長)	1名
元教員	1名
保護者(PTA会長)	1名
福祉関係者(NPO法人代表)	1名
大学生	1名

自 己 評 価				学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策	
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	児童生徒一人一人の障がい特性と指導課題を踏まえた指導	Co-MaMe等を活用した小学部から高等部まで一人一人に応じた指導の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>Co-MaMeを個別的教育支援計画及び個別の指導計画を作成するに当たって、その指標の一つとして使用した。しかしながら、Co-MaMeが精神疾患の児童生徒を対象としたものであることから、小児慢性疾患児童生徒には必ずしも適応するものではなく、医療機関の協力をいただけないケースがあった。</li> <li>児童生徒一人一人の実態を全職員が把握する目的で、年3回ケース会議を開催した。</li> <li>教職員以上に保護者が高い評価であった。</li> </ul>	A	<p>【全ての項目に関する意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>そもそもの評価基準が明確でないことから評価点3と4との間での評価点の揺れが生じる。また、本校の在籍数が少ないことから、一人の評価点が全体評価に及ぶことがある。微妙な差異に一喜一憂せず、大局から見て運営に役立ててほしい。</li> <li>全体的に高評価である。教職員の真摯な様子が見て取れる。また、このように高評価でありつつも、評価の中から問題点を見つけて改善に望もうとするのは、本校の良さである。更なる高みを目指した教育活動を期待する。</li> <li>教職員による自由記述に厳しい内容があった。これを「風通しのよい環境（何でも言いやすい環境）」と取るのか、フラストレーションが蓄積している危機的状態と取るのかは、書面からは読み取れないが、改めて共通認識を図る必要がある。</li> </ul> <p>【本項目に関する意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ICT活用」に関する教職員と児童生徒の認識の違いを具体的に分析して良かった。今後の指導に役立ててほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>精神疾患の児童生徒については、Co-MaMeを用いた実態把握に基づく指導計画によ効果が実感できることが推察されたことから、継続して使用する。一方で、小児慢性疾患等の児童生徒については、Co-MaMeに留まらず客観的な指標を用いることにし、引き続き根拠のある指導に努めたい。</li> </ul>
	保護者、前籍校、医療、福祉等関係機関等との連携	保護者、前籍校、医療、福祉等関係機関等との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の主治医が所属する県内7病院と定期的に会議を開催し、医療的見地からの助言をいただきながら、日々の授業づくりに取り組んだ。</li> <li>必要に応じて、児童生徒が利用する福祉施設等と情報交換する機会を設定し、児童生徒を取り巻く関係者が同じ方向を見て支援に当たるようにした。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き支援連携会議を開催する。また、定期開催に留まらず、児童生徒の病状に応じて臨時的に相談できる体制を継続する。</li> <li>必要に応じて、新規病院への参加を依頼する。</li> </ul>
	主体的、対話的で深く学ぶ態度を育成する授業及び特別活動の研究と推進	主体的、対話的で深く学ぶ態度を育成する授業及び特別活動の研究と推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>校内研究でICT機器を活用した授業の研究に取り組んだ。</li> <li>少人数であることを補完する目的で、地域の学生団体を招聘し対話的な授業を実施した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>在籍数の少なさに加え、登校が安定しない児童生徒の対話的な学びを保障するため、引き続き地域資源を有効に活用し、「対話」が保障できる授業づくりに努める。併せて、地域資源の更なる開拓に努める。</li> </ul>
	根拠に基づく手立ての構築及び「授業力の向上」をめざした授業改善	根拠に基づく手立ての構築及び「授業力の向上」をめざした授業改善	※番号1「一人一人に応じた指導の推進」、番号5「校内研究の充実」と合わせて評価するため、評価項目はなし。			
	ICTを効果的に活用した授業実践の推進	ICTを効果的に活用した授業実践の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>教職員のICT活用技能向上のため、サポートデスクICT支援によるICTミニ研修会を定期的に開催した。また、校外での研修にも積極的に参加し、得た情報を授業に反映させた。（例 VRゴーグルの活用）</li> <li>タブレット端末の持ち帰りに関する校内規定に基づき家庭における学習にタブレット端末を活用する生徒が増加した。</li> <li>令和6年度から第二分掌として「SDICT支援」を位置づけたことで、ハード面、ソフト面双方の支援が円滑にできるようになった。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>授業づくりの手段であるICT機器については、教員の技能向上を図るためのミニ研修会を継続する。</li> <li>今年度までの校内研究の成果であるICT機器を活用した「新若葉スタンダード」の定着を図る。</li> <li>休校等緊急時におけるオンライン授業実施に向け、体制整備に取り組む。</li> </ul>

2	豊かな心を育てる教育の展開	教育活動全般を通じた道徳教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育推進教師を中心に「特別の教科 道徳」に関する情報交換をすることで、道徳科の考え方や評価の仕方を共通理解することができた。</li> <li>・他者と意見交換しながら自己の考えを整理できるよう小学部及び中学部で学部合同の道徳科の授業に取り組んだ。</li> <li>・学校生活アンケートの結果を踏まえ、全校集会において生徒指導主事から道徳性の高まりに資する講話を行った。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いじめ」に関して児童生徒の評価の要因を探る必要がある。また、アンケート以外でもいじめの把握をする必要がある。</li> <li>・度々話題として上がるSNSは、「見えない人」とのやりとりがいじめに発展する事例もあることから、引き続き情報リテラシーに関する指導もお願いしたい。</li> <li>・「いじめ」に関して、小学部の質問項目が趣旨と異なる印象がある。次年度に向けて再考をお願いする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、道徳教育推進教師を中心に、全体計画に基づいた授業実践例を蓄積し、教員が共有できるようにする。</li> <li>・全体計画別業を作成し、学校行事等と関連させながら授業展開できるようにする。</li> <li>・引き続き「特別の教科 道徳」の時間に止まらず、全校集会などの場を活用して道徳教育を実践する。</li> </ul>	
		児童生徒と教師、子ども同士の豊かな人間関係を育む活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒会執行部が中心となり、全校集会で異年齢の児童生徒が触れ合える活動を計画、実践した。また、週1回小学部児童から高等部生徒を縦割りグループで編成した委員会活動を設定する、年2回全校児童生徒による環境美化活動を実施するなどしたことで、児童生徒相互のやりとりが充実し、人間関係の育成に資することができた。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、児童生徒会執行部を中心に、児童生徒の主体的な活動を目指した児童生徒会活動を推進する。また、週1回の委員会活動も継続する。</li> </ul>	
		病気や精神疾患に対応した指導力の向上	※番号1「一人一人に応じた指導の推進」と合わせて評価するため、評価項目はなし。				
		安全指導の徹底と自己管理能力の醸成（感染症対策、医療的ケア、いじめ防止教育、避難訓練等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来の避難訓練に止まらず、業間時間や管理職不在時の避難訓練を実施した。</li> <li>・外部専門家を招聘し、地域関係者と合同で防災に関する実地踏査を開催した。</li> <li>・定期的に医療的ケア安全委員会、いじめ防止対策委員会を開催した。</li> <li>・いじめの未然防止をめざし、従来の「いじめアンケート」に加えて「学校生活アンケート」を実施し、児童生徒の些細な変化に気づきやすい体制を整えた。</li> <li>・病弱特別支援学校であり、医療的ケアを要する児童が複数在籍することから、学校医の指導を得ながら引き続き無理のない範囲でマスク着用、手洗いの励行を継続した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度同様に計画的に安全指導に取り組むとともに、地域を巻き込んでの防災訓練や不測事態を想定した避難訓練を実施する。</li> <li>・感染症対策については、今後も学校医の指導を得ながら適切に対応する。</li> </ul>	

3	キャリア教育の推進	小・中・高一貫したキャリア教育の計画的指導の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研究の「キャリア教育グループ」において、本校版キャリア・パスポートである「キャリアブック」の活用マニュアルを作成し、更には教職員を対象とした研修会を実施した。</li> <li>・個別面談や学級懇談等で保護者に対して「キャリアブック」について説明した。</li> <li>・教職員による自己評価に加え、保護者及び児童生徒による評価も全ての項目においてA評価であった。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度積極的に行ったこと（例：地域資源の活用）を本校の強みとして一層伸長することを期待する。特に、地域とのつながりを強める活動は、キャリア教育をはじめとする本校の学校課題解決に資するものとなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、教職員の「キャリア教育」に関する理解をより一層高めるための校内研修会を開催するとともに作成マニュアルを活用しながら、本校のキャリア教育について、校内外に自信をもって説明できるようにする。</li> <li>・児童生徒、保護者に対しては本校版キャリア・パスポートである「キャリアブック」の意義や効果について丁寧に説明する機会を設定し、「キャリア教育」の充実を図るためのツールとして活用する。</li> </ul>
		自己選択と自己決定、自己表現の力を育てる指導や支援の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いずれの児童生徒に対しても、授業時間内に「自分で考え、自分で決定する」機会を設定した授業づくりを推進した。</li> <li>・特に、卒業学年の児童生徒に対しては、学級担任と進路指導主事による進路面談を複数回実施し、各自が目指す進路の実現に貢献した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校運営協議会の協力を得ながら、企業や福祉事業所等とも連携した活動を計画する。</li> <li>・身近な社会人である本校の卒業生を活用した授業を計画する。</li> </ul>
		自立と社会参加を見据えた進路研修会の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部機関を利用し、職場見学や職場体験、またハローワークなど関係する機関の見学を計画的に実施した。さらに、進学コースの生徒が在籍することから、市内の大学や専門学校などの見学を実施した。</li> <li>・保護者向けには、家庭教育学級として職場施設見学会を開催した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き取り組む。</li> </ul>
4	保護者との信頼関係の構築	児童生徒の学習成果や課題の共有（面談の実施）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別の教育支援計画並びに個別の指導計画に係る面談機会を設定し、計画的に保護者と情報交換をした。</li> <li>・個人情報の確保については、年度初めにプライバシー確保に関する意向確認をした。</li> <li>・教職員、保護者、児童生徒ともに高い評価であったが、中でも教職員による自己評価の平均が3.9（4が最高値）であった。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員と保護者及び児童生徒との信頼関係がより強まったように見ている。引き続きの指導を期待する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き取り組む。</li> </ul>
		長期欠席（入院を含む）時の支援（遠隔授業、訪問指導や保護者支援）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期欠席の児童生徒については、各学部、必要に応じて校内教育支援委員会で方針を確認し対応した。また、支援連携会議を通じ、主治医から医学的な助言をいただきながら支援に当たった。</li> <li>・病状により登校が安定しない児童生徒に対しては、医師の指導の下、オンライン授業を実施し、学校との関係が途切れないように努めた。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、支援連携会議による医学的見地からの助言を受けながら、校内教育支援委員会において支援方針を検討し、対象児童生徒の支援に当たる。</li> <li>・引き続き、病状により登校が不安定な児童生徒に対するオンライン授業は、医師の指導の下、実施する。更には、休校等の緊急時における遠隔授業について、体制を整える。</li> </ul>

5	教職員が力を発揮できる環境の構築と研修の充実	<p>休暇制度等の活用促進、会議や事務処理の効率化による時間の創出</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月に1回定時退勤デーを設定し、メリハリのある働き方を奨励した。また、成果を測るためアンケートを実施した。</li> <li>・県教育委員会の伴走型支援事業を活用し、働き方について考える機会を設けた。</li> <li>・休暇を取得しやすい月行事の設定に心がけた（例：長期休業中のノー会議デー設定）。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働く時間については考慮すべきであるが、一方で業務の質低下や教職員の意欲減退につながるようであってはいけない。今一度、働き方改革の目的を明確にするとともに、教職員一人一人の業務内容を見直すことが必要であろう。</li> <li>・働き方改革について、現在実施している手立では休暇取得増加に資するものであり、ともすると休暇取得に対する意識を縛る可能性がある。対策を考える際には、休暇を取る際に負担に感じることの意見聴取をすることも一案である。</li> <li>・そもそも教職員を取り巻く状況の改善を図るための「制度の見直し」がないことには実効性が無い。国、県としての対策が求められるところである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度も県の伴走型支援事業を活用し、自身の働きがいや働き方について考える機会を設定し、よりよい働き方について考える。</li> <li>・合理的な時間活用を提案することに加え、発生した余剰時間の活用の方向性を具体的に示すようにする。</li> </ul>
		<p>教職員が個性や研究の成果を出せる授業や事業の展開</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職歴や経験に基づき、巡回相談員や特スポ理事等を任命した。</li> <li>・管理職は教職員個々の研究意欲や研修ニーズを把握し、希望に添う形での研修派遣に努めた。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の教職員の専門分野の授業や得手不得手を考慮した分掌業務等の担当ができるような校内体制を作る。</li> <li>・引き続き、管理職は一人一人の教職員の特性やキャリアを考えた、研修の奨励に努める。</li> </ul>
		<p>教育実践情報の収集や意見交換が活発な校内研究活動の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度は、昨年度まで3カ年で実施した校内研究の効果検証を行った。より授業実践に還元できる形になった。</li> <li>・校内研究に関連して、青森市立造道中学校に対して「新若葉スタンダード」についての情報提供を行うとともに、授業参観を実施した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育研究部を中心に、引き続き校内研究の成果を授業で活用するようにする。</li> <li>・令和8年度からは、病弱特別支援学校において常に課題となる「授業内容の精選」をテーマに校内研究に取り組む。</li> </ul>
		<p>県内及び県外特別支援学校との合同研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全病連兼北海道東北病連兼青特研病弱虚弱教育部会研究大会（オンデマンド開催）に全職員が参加した。</li> <li>・児童生徒の実態並びに教職員の研究ニーズにより、東北特別支援教育研究協議会肢体不自由大会に2名参加した。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き取り組む。</li> <li>・令和8・9年度は本校が青特研病弱虚弱教育部会事務局担当になるため、各校理事と連携協力し本県の病弱虚弱教育の研究推進に努める。</li> </ul>
6	病弱特別支援教育のセンター的機能の充実	<p>院内学級ネットワーク体制の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・院内学級に在籍児童生徒がいない場合であっても、院内担当が定期的に院内学級に赴き、環境整備を行った。</li> <li>・本校の状況を周知するため、県病掲示板を活用し、掲示物を用いて定期的に情報提供した。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き取り組む。</li> <li>・校内規定を再考し、院内学級在籍児童生徒への直接的な指導に加え、短期入院により持参するタブレット端末によるオンライン授業をする入院生への機器操作に関する支援などができるようにする。これに伴うニーズの把握をする。</li> <li>・引き続き取り組む。</li> <li>また、センター的機能としてオンライン授業等本校での取組を紹介したい。</li> </ul>	
		<p>校外支援及び教育相談の充実（小・中・高等学校）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援教育コーディネーター、巡回相談員を中心に、相談に応じる体制を整えた。</li> <li>・高等学校生徒に関する相談が一定数あった。</li> </ul>	A		

		<p>本校教育機能の情報発信（おたより、学校webページの充実）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月あたりの記事更新回数目標を設定し、行事担当者や教務主任を中心に適時的に記事更新を図った。</li> <li>・学部運営計画にwebページ担当者を位置づける、行事等実施計画においてweb担当を役割として示すなどした。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、誰に向けた記事であるかということ意識し、適時的な更新を期待する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校webページの更新については、引き続き適時的に行う。</li> <li>・閲覧者に寄り添う構成にし、広く病弱教育について紹介できるようにする。</li> <li>・引き続き、著作権に留意するとともに児童生徒のプライバシー保護に努める。</li> </ul>
		<p>交流及び共同学習の推進（青森県交流籍制度）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度居住地交流は、小学部4名、中学部2名が実施した。小学部は2ないし3回の実施であったが、中学部は副籍校の理解を得て、5回以上実施した。</li> <li>・中学部で浪岡養護学校と学校間交流を実施し、高等部は学生団体レスタと協同して総合的な探究の時間に取り組んだ。</li> </ul>	A		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、居住地校交流を推進するとともに、交流成果を周知することで、希望する児童生徒が実施できる環境づくりに努める。</li> <li>・对学校という枠組みに縛られず、地域住民等との交流も視野に、児童生徒の更なる体験の充実に資する機会を設定する。</li> </ul>

(11) 総括	<p><b>【成果】</b>  ○教職員の自己評価、保護者及び児童生徒による評価の結果から、重点課題を念頭に置いた学校運営をし、当初目標としたことについて概ね達成できた。特に、教職員による自己評価は昨年度よりもさらに高くなり、全てがA評価であった。一人一人の教職員が学校経営方針を真摯に受け止め、自己の役割を認識して業務に取りくんだことによるものであると考える。このことに対して慢心することなく更なる高みを目指し、学校運営を担う一員としての自覚をもち、業務にあたるようにしたい。  ○教職員、保護者、児童生徒の三者の評価を比較分析することにより、教職員の自己評価と保護者あるいは児童生徒との間の差のある項目が明らかになった。差の大きかった部分を分析することにより、次年度の学校経営の方針における重点を検討するにあたって有効であった。</p> <p><b>【課題】</b>  ●一人一人の指導課題を踏まえた指導の実践  特別支援学校の根幹ともいえる項目でB評価項目が複数あったことは、まだまだ改善の余地がある部分であるという捉えができる。また、個々の評価を詳細に見ると、2（あまり思わない）が一定数あったことから、今一度本校の授業づくりについて再考し、授業実践に反映させたい。  特に、ICTを活用した授業については、教職員と児童生徒間での評価差が顕著であった。研修等によりICTの先進的な活用方法を授業に積極的に導入するも、児童生徒にとってはICTの活用が授業理解につながった実感が薄いことが考えられる。ICTは手段であり、活用することが目的ではないことを再確認することが必要である。また、ICT活用スキルには個人差があることから、授業において同程度の活用がなされているとは限らない。引き続き、SD ICT支援を中心としたミニ研修会を開催し、学校としてのICT活用能力の向上に努めたい。</p> ●「いじめ防止」の対策 今年度は「いじめの未然防止（予防的対応）」に心がけ、従来実施してきた「いじめアンケート」の他に「学校生活アンケート」の実施、SNSトラブルへの早期介入など、積極的に取り組んできた。教職員としてはこれら実践を目の当たりにしている一方、児童生徒に取ってみると「いじめ」があつて解決したというような直接的な効果を実感するに至っていないことが推察される。今後も積極的に予防的対応を実践するとともに、些細なことでも話しやすい関係性の構築に努めたい。 ●積極的な情報発信 昨年度の評価を受けて、記事の構成の見直しや更新頻度の具体目標を示したことで保護者による評価が上昇した。しかしながら、低めであった評価項目を詳細に分析すると、本校教育活動に関する情報が不足していることによるものであることが推察された。引き続き、本校教育活動に関する記事の適時的更新に努め、本校の教育活動として病弱特別支援学校に関する理解啓発に努めたい。
---------	---